

目的 与論島は鹿児島県に属しながら、距離的には沖縄県に近いという地理的条件で琉球文化の影響をうけながら、本土の文化も吸収して独自の民俗文化を築き上げた。最近は言語学、民俗学の立場から研究が進められている。今回、沖縄に伝承する芭蕉布と与論島のバシヤギ又(芭蕉衣)について比較、現存する衣服について聞き取り調査を試みた。

調査内容 与論島の芭蕉布の物性(強度、伸度、防しわ性、硬軟度、保温性、収縮率、アイロン適温)について測定し、沖縄の芭蕉布との違い、柄の特徴、着装法、縫製法について調査した。

結果 ①与論島のバシヤギ又はたて糸に木綿、麻、絹を織り込むものもある。②物性の測定結果、地域に適した布としての性能が示された。すなわち硬くて体に密着しない、冷感を伴う布で、(わになりやすいがしわが伸びやすい特性をもつ。③柄は沖縄の芭蕉布に比べて一般に小柄で、奄美大島紬の影響がみられる。④着装法は、平安朝の庶民の普段着に似た着装法で、筒袖にして仕事着としての機能性をもたせ、ふくらはぎ中央あつり丈の着装である。明治時代には左前着装法があったといわれるが、現在は右前着装法で、沖縄のウシン午の着装法とは異なる。⑤縫製法の特徴として(はも)サシを用いないことで、本人の体型に合わせて縫製する。かつては琉球の縫製法もみかけられたといわれるが、現在では浴衣の縫製法と殆んど変わらない。かつては自給自足の厳しい自然条件に打ち勝ちなぬら心暖かい人間関係を生み出し、琉球文化と奄美大島や本土の文化を吸収し、独自の民俗性を確立し、新しい時代の中でこれらの文化を伝承しようとする古来の方達に敬意を表したい。